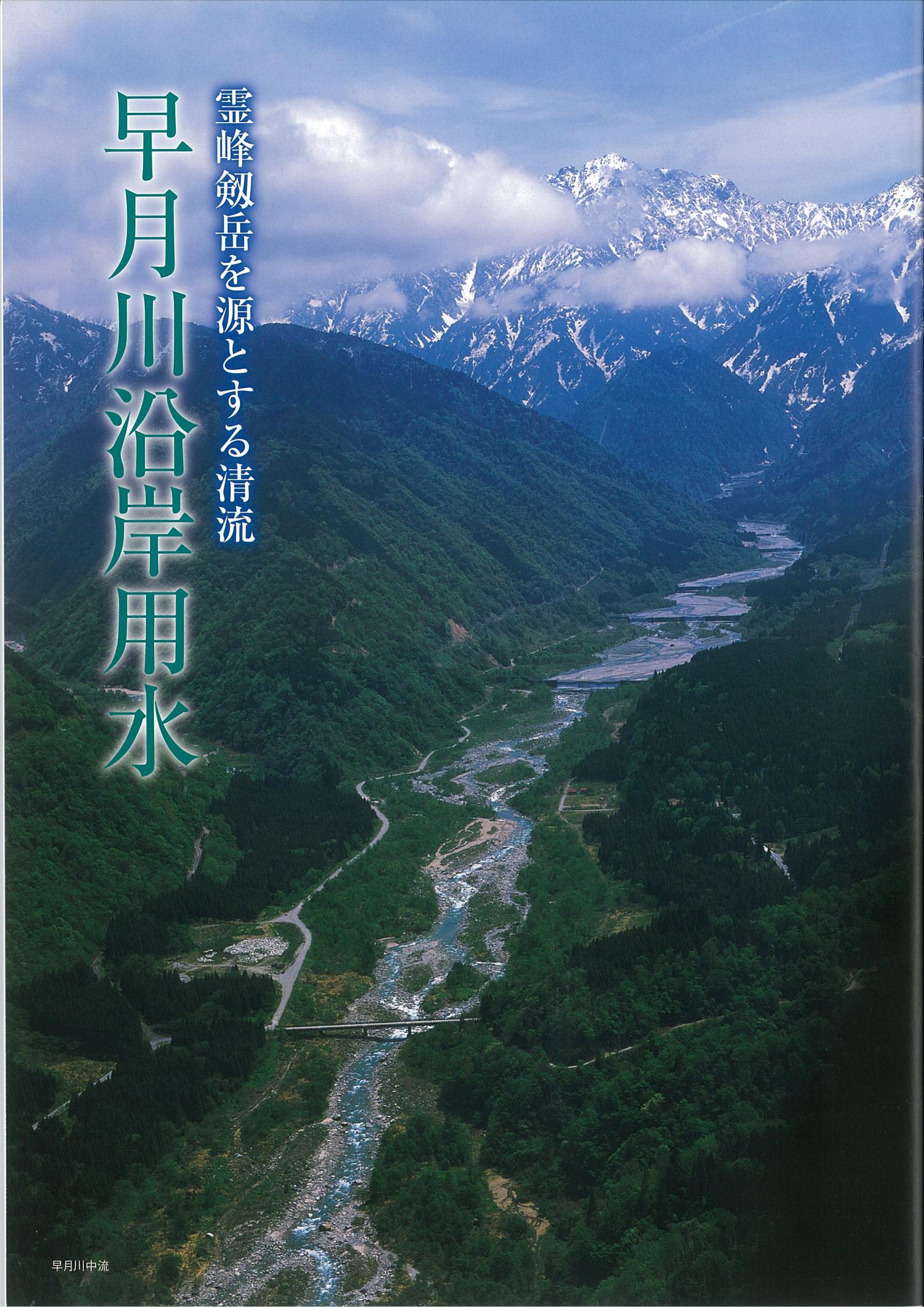


# 早月川沿岸用水

靈峰剣岳を源とする清流





**早月発電所**  
昭和55年（1980）に運転を開始した早月発電所は、水路の落差を利用して発電を行い、その電力で得た収入を土地改良区の維持管理に充てる全国初の施設である。その用地・資金を土地改良区が全額出資して建設されたもので、農業用水を使用した「小水力発電」の先駆となつた。（第7話）



**用水の多面的機能**  
農業用水は、農業生産のほか、火災の消火、消流雪に利用されるなど、地域用水としてさまざまな面から私たちの生活を支えている。また農地や土地改良施設は、水害の防止や地域の自然環境の維持、水源の涵養など、完全で安心な日々の暮らしを支えている。（第8話）



斎木久治



石坂清



椎名道三



**県内初のほ場整備**  
昭和38年（1963）、区画面積を30アールとする富山県内初の大規模は場整備が、中加積地区で着工された。これを皮切りに各地区では場整備が進み、不整形な水田は、見渡す限り碁盤の目のように整った水田に生まれ変わった。（第6話）

**農業振興に尽力した先人**  
農民の父・椎名道三、早月川合口化の先達・石坂専吉、流水客土の父・石坂清、小水力発電の先駆者・斎木久治―彼らの人たちが艱難辛苦を乗り越え完成させた事業や施設は、貴重な地域の財産として利用されている。（第9話）



**室山開き**  
江戸時代後期まで水に恵まれない未開地であった室山野台地。硬い岩石層や土砂崩れなどによつて開拓と用水開削は困難を極め、一度頓挫した。その後、文政8年（1825）、椎名道三の名声を高めた道三の手によって漸く完成。椎名道三の名声を高めたのが、この「室山開き」であった。（第3話）



**氾濫と渇水**  
早月川流域の住民は、日照りによる渇水と、一度雨が降り水かさが増すと一気に激流となつて襲う氾濫に苦しめられてきた。早月川本流が現在の河道となつたのは明治時代に入つてからである。（第4話）



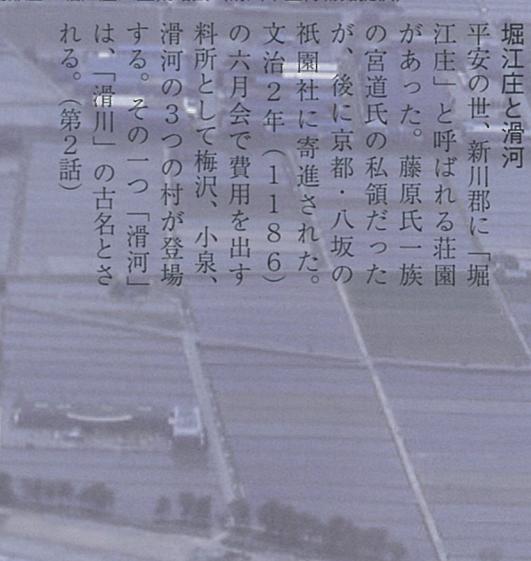
**用水の合口化と水路の整備**  
石坂専吉、石坂清らが用水の取り入れ口を一括する合口化を粘り強く推し進めた結果、昭和28年（1953）に国営早月川農業水利事業が着工し、建設されたのが合口取水堰堤・養輪頭首工である。国営事業に続いて実施された県営早月川沿岸用水改良事業は、昭和31年（1956）に始まり、17年の歳月をかけて完成した。（第5話）



**早月川**  
早月川は、北アルプス立山連峰の中でも最も陥しく、古来より「神が宿る靈山」として知られる剣岳を源とする二級河川である。その水系の流長は約37キロメートル、全体の平均勾配は約8・3パーセントと、わが国有数の「暴れ川」に挙げられる。（第1話）



**掘江庄と滑河**  
平安の世、新川郡に「堀江庄」と呼ばれる荘園があつた。藤原氏一族が、後に京都・八坂の祇園社に寄進された。文治2年（1186）の六月会で費用を出す料所として梅沢、小泉、滑河の3つの村が登場する。その一つ「滑河」は、「滑川」の古名とされる。（第2話）



# 発刊の言葉

早月川沿岸土地改良区 理事長 常田 幸雄

北アルプスの靈峰、劍岳を源とする早月川、その清流は流域3000ヘクタールあまりの農地に潤いと恵みを与え、農村として市街に住む人々には安らぎを与えています。

流域の稻作は、平安時代の末期、堀江荘（京都八坂神社の莊園）として文献に記載されているのが最古の記録と言われています。

やがて戦国時代に入り、金山の開発（上市町下田、魚津市虎谷、金山谷地内など）が始まり、近世に入ると加賀藩への新田開発の願い出による室山野用水の開削と台地の開拓を進めてきたのです。室山野用水の開削は、今から約200年前に始まりましたが、数多くの人々が失敗し、資金難などで断念していたのですが、最後には椎名道三が完成させたのです。このルート選定については、トンネル箇所が數ヵ所あることから、早月川流域の金山で働くいた金山師が携わっていたのではないかと思われます。

その後、明治から大正にかけては、度重なる水害に見舞われ、堤防の決壊や取水施設の流出の繰り返しであり、県は明治政府に願い出てオランダ人技師デ・レーケに技術指導を仰ぎ、五厘堤が築造されたのです。また同時期に、デ・レーケは常願寺川の復旧も指導しています。また、夏の日照りによる干ばつ被害を原因とする水争いも絶えなかつたのです。当時の水路は、素掘水路であるうえ、扇状地特有の下層が砂礫であり、少量の水では地下浸透が甚だしく下流域まで到達せず、上流の室山野台地の粘質土地域との紛争が毎年繰り返されました。時には流血騒ぎまで起きたこともあり、村長と各用水関係者が集まり、水利協調会が大

正14年11月、滑川7カ村、魚津市3カ村で結成されたのです。これらの歴史を踏まえ、戦後になって石坂専吉氏、石坂清氏、斎木久治氏などが尽力され、合口化を目指されたのです。

特に先々代理事長である斎木久治氏は、農業土木技術者であったことから、農業用水の有効利用を考慮した水力発電を念頭に置いた事業計画を立てられ、現在の発電事業の基礎を作られたのです。その根底には、長年にわたる農民の水に対しての苦しみを、身をもって体験され、将来にわたり農家負担の軽減を図られたのです。

このような先人たちの努力から、昭和29年度に合口化事業である国営かんがい排水事業が始まり、各支線への分水や水路改修も含め、現在の形になつたのです。

現在、農業用水は、農地を潤すだけでなく、防災や消流水になくてはならない役割のほか、人々に安らぎと潤いを与える、そして発電事業など、多種多様な役割も担つております。

今後は、先人たちの偉業を受け継ぎ、施設を守り、施設を有効に活用し長寿命化を推進してまいりたいと考えております。

## 靈峰劍岳を源とする清流 早月川沿岸用水 目次

発刊の言葉 4

### 第1話 早月川と流域の概要 6

わが国有数の「暴れ川」  
流域に縄文時代の集落跡

旧扇状地と新扇状地

〈コラム〉剣岳と立山信仰

### 第2話 近世までの早月川流域 8

開墾と莊園の設置

用水の開削と新田開発

### 第3話 室山野用水の開削 10

旧扇状地と室山野台地

苦難が続いた室山開き

椎名道三と室山野用水

〈コラム〉木呂流し

### 第4話 水とのたたかい 12

繰り返される氾濫と渴水  
合口化へのみちのり

### 第5話 合口事業と旧用水の近代化 14

国営早月川農業水利事業

●合口取水堰堤一蓑輪頭首工

〈コラム〉マンドウサマと早月川水神社

県営早月川沿岸用水改良事業

●第1期 流水客土 幹線水路

●第2期 鋤川用水路・法花寺用水路・北野用水路

### 第6話 農業の近代化とほ場整備 18

農業の近代化に向けて

県内初のほ場整備

ほ場整備事業の進展

ほ場整備に伴う排水路の確保

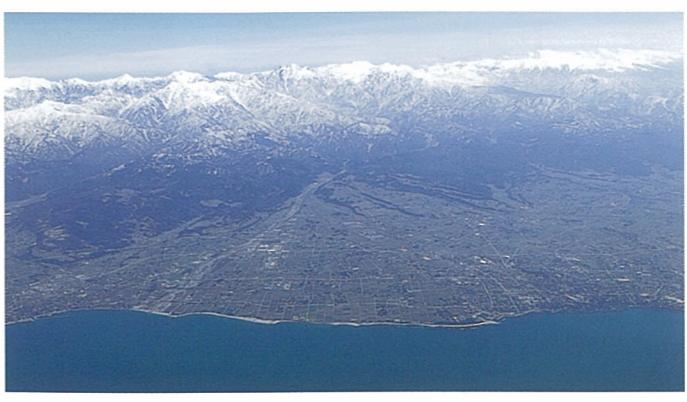
● 第2期 郷用水路	● 第3期 大浦用水路・大崎野用水路
室山野用水路・東福寺野用水路	

#### 早月川沿岸用水歴史冊子編さん委員

常田 幸雄	早月川沿岸土地改良区理事長
大重 勇	室山野用水土地改良区理事長
白岩 初志	滑川市立博物館長
三浦 勇	滑川市役所建設課長
山本 健次	富山県農林水産部農村整備課長
新谷 隆	富山県新川農林振興センター 指導部長
永森 雅之	富山県農林水産部農村整備課長
栗三 直隆	富山県新川農林振興センター 技術次長
松井 保	
湯沢 清則	

#### 早月川沿岸用水歴史冊子編集協力者

農民の父	椎名道三
早月川合口化の先達	石坂專吉
流水客土の父	石坂 清
小水力発電の先駆者	斎木久治



上空から見た立山連峰と早月川扇状地

# 早月川と流域の概要

## わが国有数の「暴れ川」

早月川は、鋭い岩峰が標高2,999メートルの塊となつて鎮座する剣岳に源を発し、富山湾に流れ下る。剣岳山頂から河口に至る早月川水系の長さは約37キロメートル、全体の平均勾配は約8・3パーセント、わが国有数の急流河川に挙げられる「暴れ川」である。早月川の源流をたどると、剣岳小窓尾根から流れる白萩川と、室堂乗越を源にした立山川が、標高約750メートルの剣登山の要衝として知られる馬場島付近で合流する。



早月川下流域（入会橋上空より早月川下流を望む）

そこから下流では小又川や、鍋増谷などから流入する谷水が加わり、さらに蓑輪地区で小早月川が合流する。国営水利事業で堰堤が造られた蓑輪から、河口までの距離は約11キロメートル。その流域に広がる扇状地は急勾配で、多くの河川で見られるならか川原は存在せず、中流域の勢いをそのままに、富山湾へ注ぎこむ。

早月川が登場する最も古い文献は、「万葉集」に収められている大伴家持が詠んだ歌である。越中国司として赴任した家持は、雪が消え、水がさが増して、とうとう流れる早春の延楓河（早月川）を、

立山の 雪し来らしも 延楓の  
河の渡り瀬 鎧浸かすも

## 流域に縄文時代の集落跡

早月川は、上流から下流へと羽状に広がり、その流域面積は約134平方キロメートル。魚津市虎谷付近から北

祭祀や呪術に使われた石棒などといつしょに、網の錘にされた石錘もみつかつてのことから、山の恵みだけではなく、漁労によって川の恵みも享受した拠点的集落であったことがわかる。また平成24年度の調査により、堅穴式住居が並ぶ居住域は直径が280メートルもあることがわかった。これは、縄文中期の環状集落では、国内最大級の規模である。

扇状地の土壤は、扇状棚田地帯では洪積層で赤褐色ローム状、表土は15センチメートル程度の壤土・埴壤土となっている。勾配が緩やかな扇状平野地帯は、砂礫層をベースに、表土は10～15センチメートルの砂礫壤土となっている。両岸とも腐植土や鉄分などの含有が少なく、保水力に乏しく、水が浸透しやすいのが特徴である。



千鳥遺跡。発掘された炉跡全望（『滑川市史』考古資料編所収）



早月上野遺跡（『早月川風土記』所収）

## 旧扇状地と新扇状地

護摩堂・東福寺野・大日付近のかなり広い扇頂を持つ旧扇状地は、一段低い下大浦、大崎野段丘上まで見られる。これは、新第三紀層の侵食面の上に不整合に覆いかぶさる堆積層で、礫層と砂層の互層からなり、柿沢礫層と呼ばれる。護摩堂川、郷川は当時の早月川の分流で、流域に扇状地が形成された

が、その後に起きた地殻変動により地盤が隆起し、当時の分流が本流と分離。この両川によって侵食が進み、基盤の第三紀層まで達している。

新しく形成された扇状地を、旧扇状地に対して新扇状地と呼んで区別している。新しく形成された扇状地を、旧扇状地に対して新扇状地と呼んで区別している。

鋤川用水取り入れ口付近を主軸として形成された新扇状地は、旧扇状地がある大崎野段丘崖と、上市川下流の河谷、魚津市上中島段丘崖によつてできた谷間に形成された扇形をなしていない。勾配は上市川に近づくにつれ、や

やくなる。特に地区の西部に位置する中加積、西加積地区の両地帯においては、季節風によつて河口に土砂が堆積し、洪水等の被害をひんぱんに受けた場所として知られる。

方へ広がる扇状地周辺の地形は、上流は氷蝕地形、中下流は幾段にも発達した隆起扇状地を形成している。早月川を挟むようにして形成された両岸の台地には、縄文時代の集落跡が残る。左岸は滑川市千鳥の千鳥遺跡、右岸は魚津市上野の早月上野遺跡である。堅穴式住居跡とともに出土した土器の多くは、縄文時代中期のものである。狩猟のための矢に使うとされる石鏃や、伐採・加工に用いられた石斧、

剣岳は、北アルプス立山連峰の中でも最も陥しく、天を突き刺すような威容を見せる。山麓の村々では、昔から「神が宿る靈山」としてあがめ、「人が登つてはならない山」と恐れられてきた。人々は朝夕、山に向かって手を合わせ、その日の無事を祈願した。

明治40年（1907）、この前人未到とされて登った剣岳山頂へ、三角点測量のために、宇治長次郎の案内で登つた国測量官・柴崎芳太郎一行が、剣岳や大日岳で錫杖頭（後に国重要文化財）を発見した。これは9世紀・平安時代初期のもので、その頃すでに修験者が修行のために登頂していたことが明らかとなつた。平成21年（2009）に公開された映画「剣岳点の記」では、柴崎測量隊の登頂を通じて、この実話を描かれている。

立山に人が登つた痕跡で最も古いものに、美女平で発見された縄文時代の石鍔がある。天平19年（747）、越中の国司として赴任した大伴家持は「立山の賦」と題して長歌短歌を詠み、これを「万葉集」に収めた。これが、立山を歌つた最古の文学と言われる。

9世紀後半には天台座主康济に「越中立山建立」の記録があり、また立山開山伝説にかかる佐伯有若の延喜5年（905）の自署も発見された。これらからみて、一般的な立山開山は9世紀後半ごろと思われる。

## コラム 剣岳と立山信仰

剣岳は、北アルプス立山連峰の中でも最も陥しく、天を突き刺すような威容を見せる。山麓の村々では、昔から「神が宿る靈山」としてあがめ、「人が登つてはならない山」と恐れられてきた。人々は朝夕、山に向かって手を合わせ、その日の無事を祈願した。

明治40年（1907）、この前人未到とされて登つた剣岳山頂へ、三角点測量のために、宇治長次郎の案内で登つた国測量官・柴崎芳太郎一行が、剣岳や大日岳で錫杖頭（後に国重要文化財）を発見した。これは9世紀・平安時代初期のもので、その頃すでに修験者が修行のために登頂していたことが明らかとなつた。平成21年（2009）に公開された映画「剣岳点の記」では、柴崎測量隊の登頂を通して、この実話を描かれている。

立山に人が登つた痕跡で最も古いものに、美女平で発見された縄文時代の石鍔がある。天平19年（747）、越中の国司として赴任した大伴家持は「立山の賦」と題して長歌短歌を詠み、これを「万葉集」に収めた。これが、立山を歌つた最古の文学と言われる。

9世紀後半には天台座主康济に「越中立山建立」の記録があり、また立山開山伝説にかかる佐伯有若の延喜5年（905）の自署も発見された。これらからみて、一般的な立



剣岳山頂出土の銅錫杖頭（富山県立山博物館所蔵）



大伴家持歌碑（魚津市三ヶ）



早月川流域図（『富山県土地改良史』より作図）

# 近世までの早月川流域

## 開墾と莊園の設置

奈良東大寺の大仏造立は、墾田永年私財法が公布された天平15年（743）から開始された。その維持費用の財源確保のため、全国に田地の開墾と莊園の設置が認められた。

正倉院に残る史料には、当時の越中国内で十ヵ所の莊園が占定されたことが記されている。

天平宝字3年（759）の「越中国新川郡丈部野地図」には、新川郡にあつた東大寺領丈部庄の概要が記されている。

これによると、すでに開墾されたいた土地三六町四反九十歩に、未開地四七町六反一二二歩を加えた総面積が、八四町二一一歩（約83万平方メートル）余り。地図に描かれた道路や川筋から、「尾前道」は滑川市辰野から大浦方面への道とすると、「高市溝」は砂子田川、「丈部溝」は北野川、また南の流れを鋤川と見なすことができる。そのためこの地図は現在の滑川市中川原付近で、辰野から柳原方面に展開した莊園と推察されている。

平安時代には、「堀江庄」と呼ばれる莊園が新川郡にあつた。

ここは藤原氏一族の宮道氏の私領

だつたが、康治元年（1142）に松室法橋<sup>まつしほうきょう</sup>という人物に寄進。その時の証書に、寄進した領地の範囲が記されている。堀江、伊遠之見、小泉、梅沢、高槻などの地名は、現在も滑川市内の大字名として残っている。莊園の範囲も記されており、東限の「横道」は上

市街道、西の「水橋并海」は旧水橋町と海岸線まで、南は「里河流並小井手境」となつており富山市水橋小出付近、北限の「扶山」は、滑川市坪川の一里塚西に存在した小高い山を指すものと解釈されている。

堀江庄は、後に京都八坂の祇園社に寄進されたが、文治2年（1186）に行われた六月会で、費用を出す料所として、梅沢、小泉と「滑河」の三カ村の地名が登場する。この「滑河」は「滑川」の古名である。「滑」は、古くは「ぬめる、なめる」と読み、低湿の廃川地や沼地を意味する文字のこと。かんがい技術の未熟な時代に、比較的農耕に適した低湿地に自然発生的に成立した小村落が、莊園の中に取り込まれていったと推測される。



旧郷用水取水口（『富山県土地改良史』所収）

## 用水の開削と新田開発

鎌倉時代に入ると、莊園や公領を管理支配する地頭職が置かれた。

この地の地頭代であった土肥氏の祖先が、莊園に納めるべき年貢を納めず、その費用で開拓に努め、広大な私領を保有し、強固な勢力を有する在地豪族として成長した。その後、土肥一族は勢力を堀江南東に伸ばして戦国大名に成長し、天正11年（1583）佐々成政に滅ぼされるまで、約300年間栄えた。

この頃の早月川には、これといった堤防もなく、増水のたびに川の流域も変わつたと考えられる。かつて大浦の入会橋辺りから室山丘陵沿いに鋤川へ主流をなしていたが、自ら運んだ土砂の堆積によって移動し、水尾山対岸から鋤川へ本流になつたといわれる。このような状況は、明治29年に、オランダ人土木技術者のデ・レーケが設計したといわれる石積みの五厘堤が大浦地内に築かれるまで続いた。

慶長年間（1596～1615）、旧扇状台地の北端・大崎野を水田にするために、大崎野用水が掘削された。早月川の水を引くため、取水口を上大浦の上手に設け、大崎野一帯をかんがいした。

明暦3年（1657）の頃には、大崎野一帯で500石高を収穫した。その後、安永から寛政年間（1772～1801）にかけて大崎野用水を拡張

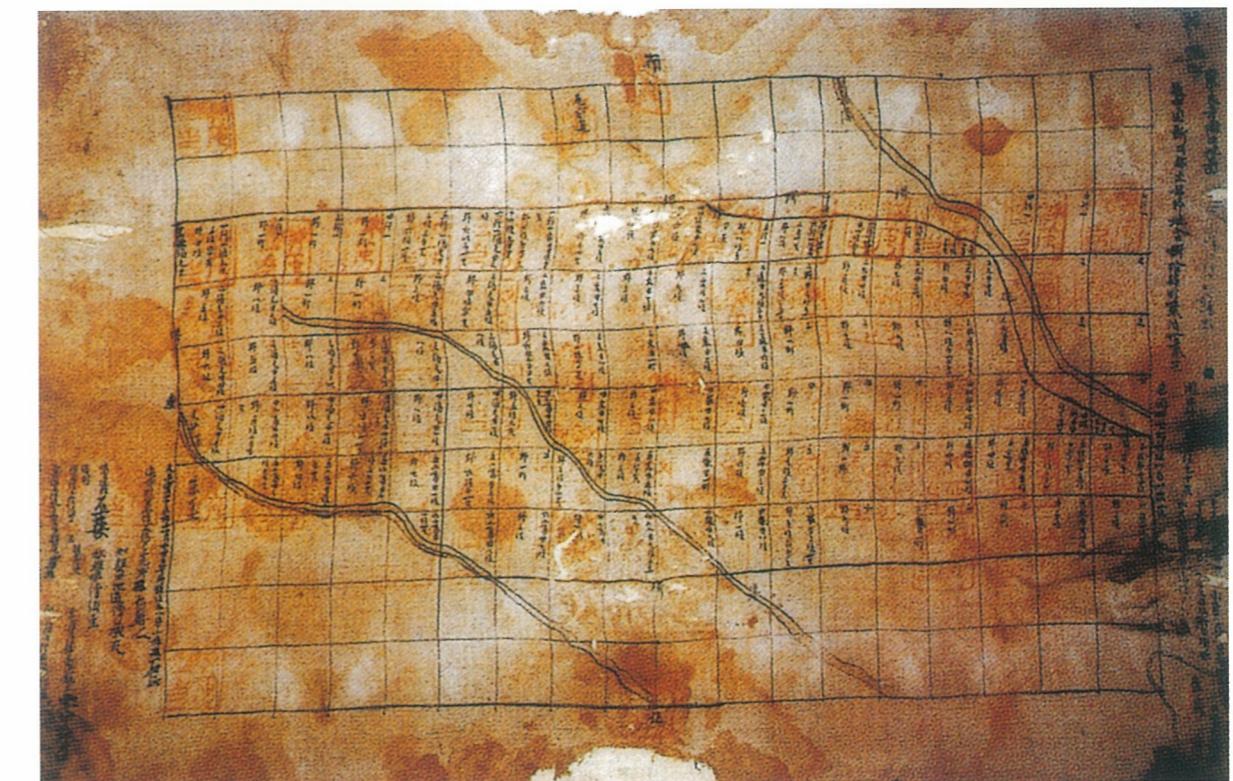
し、さらに開拓が進められた。

早月川の氾濫筋で、大浦の上手から切れ込み、室山・大崎野の断崖沿いに流れた洪水跡を改修して用水としたのが郷用水である。

鋤川用水および郷用水が供給される村々には「新」と名のつく村が多い。藩政時代初期に記された「越中四郡絵図」（小矢部市蔵）には「安田新」ぐらいのものだったが、その後ほど後の寛文10年（1670）の村御印には、「新」と名のつくものが多く記されている。一塙新、大島新、中新、稻泉新、七ノ口新、柄山新、金屋新、宮ノ窪新、四ツ屋新、柿ノ木新、森野新、上島新、平塙新、沖田新、岡新などである。



早月川掛り用水絵図（江戸時代後期、富山県立図書館所蔵）



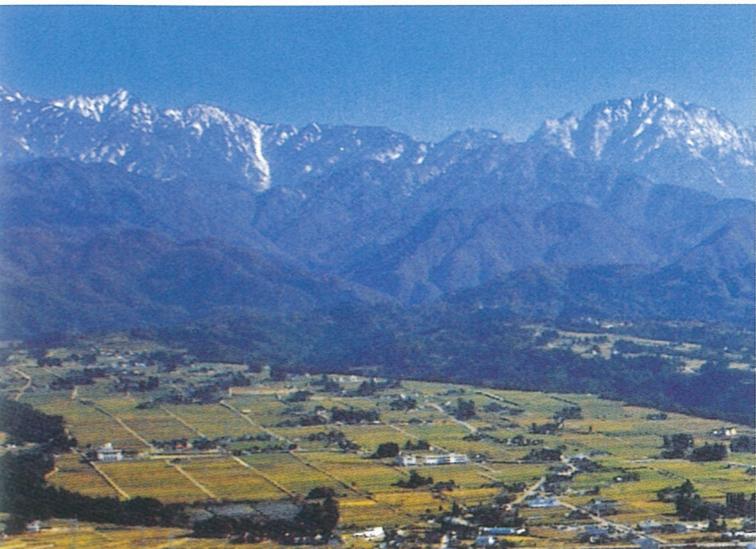
越中国新川郡丈部野地図（正倉院宝物、宮内庁所蔵）

# 室山野用水の開削

## 旧扇状地と室山野台地

室山野台地は早月川左岸に位置し、標高290メートルの大日から北方へ向かって傾斜している。

台地の大半は江戸時代後期まで水に恵まれず、小さな溜池や湧水でわずかな土地が開かれているだけで、ほとんどが雑木林に覆われた未開の地であった。



室山野台地の遠望（『早月川風土記』所収）

加賀藩は財政を確保するために新田開発を促進する必要があり、ひたすら米の生産が確保され増産されるよう政策を進めた。親が子どもたちに田畠を分配相続すると農民一人当たりの年貢を納める能力が低くなることを恐れ、元和元年（1615）に「田畠売買禁止令」を発令。自分の土地を持たない農民にとって、開拓は本百姓になれる絶好の機会だった。

文化11年（1814）、藩財政の強化と農村の二・三男対策から、室山野開拓の声が再びあがつた。そこで、市田文右衛門が中心となつて加賀藩に新田開拓を申し出・許可を得て室山野台地の開拓が計画された。これを「室山開き」と呼んでいる。

享和3年（1803）、栗島村（現富山市）の市田文右衛門が中心となつて加賀藩に新田開拓を申し出・許可を得て室山野台地の開拓が計画された。これを「室山開き」と呼んでいる。

早月川上流から取水する用水路が完成すると、室山野で1500石（225トン）の収穫が見込まれた。工事に要する資金は近くの村々から調達し、伊折、蓬沢、中村、蓑輪などの村々から人夫

翌12年、藩測量方である高木村（現射水市）の石黒信由が室山野一帯の開墾地を測量。これに基づき、近くの村々から農家の二、三男や、石高を持たない頭振り百姓ら62人が選ばれ、一人当たり十五石（約2250キログラム）程度の収穫が期待できる土地を、荒れ地のまま分け与えられ、開墾に当たった。

一方、用水路の掘削は、先に中止となつた文右衛門の用水路を基に工事の区域や人足賃を決め、多くの人夫を督

促しながら進められた。

新しい用水の取り入れ口は、伊折村の手前赤谷とされたが、上流では伊折の荒秃山をはじめとした谷が、中流では折戸村、中村の下、下流では天狗嶽がよく崩れた。このため、この年にできた用水路は、通年で水が流れることはなかつた。しかし、藩の財政難の時期でそれ以上工事を続けることはできなかつた。

## 椎名道三と室山野用水

文政8年（1825）、室山野に入植した百姓の窮状を聞いた椎名道三は、用水路の再掘削を藩へ願い出て、

工事に必要な費用を藩から借用し、工事に着手した。

二度の失敗の跡を調査し、旧用水路より50メートルほど低い所を選んだ。崩れやすい荒秃山を避け、それより少し下流の伊折発電所の上手付近に早月川の水の取り入れ口を設け、崖のふちの岩に沿つて全く新しい用水路を掘削することにした。

土砂崩れの止まらない葦原谷では2000本の坑木を打ち込み、蓑輪の岩石山では13カ所に全長540メートルの隧道を築いて掘り進んだ。

文政10年（1827）、全長18キロメートルに及ぶ用水がようやく完成。先の用水と区別して、これを「新用水」と呼んだ。

20年後の嘉永元年（1848）、室山野台地の村々は藩の検地を受け、大日、千鳥、中野、下野、堀ノ内、大林がそれぞれ独立した村として認められた。石高は1061石、127町3反（約127.3ヘクタール）であつた。

一方、用水路の掘削は、先に中止となつた文右衛門の用水路を基に工事の区域や人足賃を決め、多くの人夫を督

20年後も工事は中止された。

文化11年（1814）、藩財政の強化と農村の二・三男対策から、室山野開拓の声が再びあがつた。そこで、市田文右衛門が中心となり、藩費で工事が再開された。

翌12年、藩測量方である高木村（現射水市）の石黒信由が室山野一帯の開墾地を測量。これに基づき、近くの村々から農家の二、三男や、石高を持たない頭振り百姓ら62人が選ばれ、一人当たり十五石（約2250キログラム）程度の収穫が期待できる土地を、荒れ地のまま分け与えられ、開墾に当たつた。

一方、用水路の掘削は、先に中止となつた文右衛門の用水路を基に工事の区域や人足賃を決め、多くの人夫を督

工するものは「白木呂」と呼ばれた。白木呂は早月川左岸の大浦（現・滑川市）で、薪木呂は早月川左岸の中川原で引き上げられた。木呂を引き上げる場所は「土場」と呼ばれ、その名は旧国道筋に俗名となって残っている。

薪木呂は街の人々にとって燃料として欠かせないものであり、地元の滑川町を中心にして、水橋町や東岩瀬町で売られた。木呂一間（横・高さそれぞれ約1.8メートル、奥行約0.9メートルの容積）につき、白木呂は二匁、薪木呂は七分の運上金を收めねばならなかつたが、山村の人々にとって貴重な収入源となっていた。

この木呂流しきめぐり、下流域の農民と山村の人々との間に何度も紛争が起きた。川水を農業用水に利用している農民にとって、木呂流しきは洪水の原因となり、堤防を壊される恐れがあつたからだ。農民が木呂流しを禁ずるよう藩へ訴えると、山村の人々は暮らしが成り立たないと反発し、禁止と云詫が繰り返された。

明治期に入り、道路が次第に整備されると、最終的に木呂流しきは禁止となつた。

室山野用水・東福寺野用水の分水工（室山野用水土地改良区提供）

工事に必要な費用を藩から借用し、工事に着手した。二度の失敗の跡を調査し、旧用水路より50メートルほど低い所を選んだ。崩れやすい荒秃山を避け、それより少し下流の伊折発電所の上手付近に早月川の水の取り入れ口を設け、崖のふちの岩に沿つて全く新しい用水路を掘削することにした。

土砂崩れの止まらない葦原谷では2000本の坑木を打ち込み、蓑輪の岩石山では13カ所に全長540メートルの隧道を築いて掘り進んだ。

文政10年（1827）、全長18キロメートルに及ぶ用水がようやく完成。先の用水と区別して、これを「新用水」と呼んだ。

20年後の嘉永元年（1848）、室山野台地の村々は藩の検地を受け、大日、千鳥、中野、下野、堀ノ内、大林がそれぞれ独立した村として認められた。石高は1061石、127町3反（約127.3ヘクタール）であつた。

一方、用水路の掘削は、先に中止となつた文右衛門の用水路を基に工事の区域や人足賃を決め、多くの人夫を督

20年後も工事は中止された。

文化11年（1814）、藩財政の強化と農村の二・三男対策から、室山野開拓の声が再びあがつた。そこで、市田文右衛門が中心となり、藩費で工事が再開された。

翌12年、藩測量方である高木村（現射水市）の石黒信由が室山野一帯の開墾地を測量。これに基づき、近くの村々から農家の二、三男や、石高を持たない頭振り百姓ら62人が選ばれ、一人当たり十五石（約2250キログラム）程度の収穫が期待できる土地を、荒れ地のまま分け与えられ、開墾に当たつた。

一方、用水路の掘削は、先に中止となつた文右衛門の用水路を基に工事の区域や人足賃を決め、多くの人夫を督

2メートル、延長距離15キロメートル以上に及ぶ用水路を掘削する計画だつたが、途中、固い岩石層や土砂崩れに阻まれ、工事は計画通りに進まなかつた。そのため人足賃など費用がかさみ、文化4年（1807）、資金難のため工事は中止された。

文化11年（1814）、藩財政の強化と農村の二・三男対策から、室山野開拓の声が再びあがつた。そこで、市田文右衛門の養子・藤五郎と能登国河丞、小林村（現滑川市）の宝田宗兵衛の三人が中心となり、藩費で工事が再開された。

翌12年、藩測量方である高木村（現射水市）の石黒信由が室山野一帯の開墾地を測量。これに基づき、近くの村々から農家の二、三男や、石高を持たない頭振り百姓ら62人が選ばれ、一人当たり十五石（約2250キログラム）程度の収穫が期待できる土地を、荒れ地のまま分け与えられ、開墾に当たつた。

一方、用水路の掘削は、先に中止となつた文右衛門の用水路を基に工事の区域や人足賃を決め、多くの人夫を督

2メートル、延長距離15キロメートル以上に及ぶ用水路を掘削する計画だつたが、途中、固い岩石層や土砂崩れに阻まれ、工事は計画通りに進まなかつた。そのため人足賃など費用がかさみ、文化4年（1807）、資金難のため工事は中止された。

文化11年（1814）、藩財政の強化と農村の二・三男対策から、室山野開拓の声が再びあがつ



# 合口事業と旧用水の近代化

## 国営早月川農業水利事業

昭和28年に着工した国営早月川農業水利事業（～37年）は、従来から早月川両岸に設けられている各用水の取り入れ口を合同で取水するため、滑川市蓑輪の早月川本流に合口取水堰堤を作り、毎秒最大約16立方メートルの



蓑輪頭首工（『早月川農業かんがい排水事業概要書』所収）

水を一括で取水しようというものである。

さらに堰堤取り入れ口や用水沈殿槽に接続して、トンネルや水路、サイフォンなどでつながった幹線導水路3887メートルを新設し、滑川市上大浦へ導水し、ここから約50メートルの大落差で下へ落とし、平地で两岸の分水路に二分させる。そのほかに下樋、大浦、大崎野の三用水にも分水する計画である。

### ●合口取水堰堤—蓑輪頭首工

早月川は急流河川であり、堰堤建設予定地である蓑輪地で小早月川と合流して流路を北東から北に変えている。こは河川のちょうど狭小部に位置することから、取水が容易で経費が安いうことから、治水上の悪影響が少なかつた。堰堤は洪水時には巨石や転石が流下するため、川底に当たる部分を鉄板張りにした。また水路に入る流砂を少なくするための沈砂池が、地形の関係から十分な大きさが確保できなかつたため、堰堤の貯留部にその機能を持たせた。さらに取り入れ水門と沈砂池の間に簾のような整流板を、沈砂池の出口に流量調整室を設けて、取水量を調整するなどの工夫がなされている。



流水客土による掘削（『富山県土地改良史』所収）

## 県営早月川沿岸用水改良事業

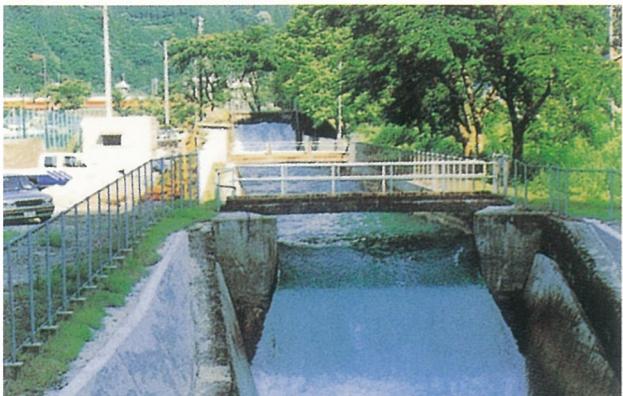
昭和31年～昭和48年に実施された県営早月川沿岸用水改良事業では、滑川市側の左岸幹線水路（延長約618メートル）を北陸電力株式会社第一発電所放水路と並行して新設し、滑川市杉本で郷、鋤川、北野の三用水に分水。さらに幹線水路の末端から早月川堤防に沿って、中村用水連結水路を設けた。右岸にあたる魚津市側の連結水路（453メートル）は、サイフォンで魚津市升方へ入り、堤防裏で有山用水を分水。さらに吉野・川縁用水で、連結水路を設けた。

また左岸幹線水路から分岐する郷、鋤川、北野の三用水、総延長23369メートルの水路を改修して、漏水の防止と配水の適正化を図った。さらに大浦と大崎野用水を統合し、4040メートルの水路を改良した。

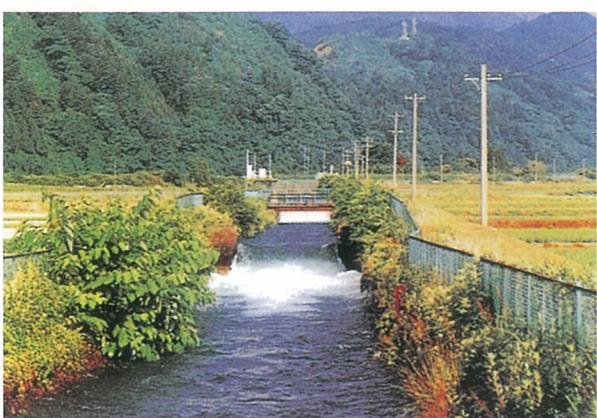
国営事業と県営事業を合わせて、21年間の歳月と総事業費1億8400万円の巨費が投じられ、両岸用水の合口事業の達成、幹線水路の完成、支線用水路2万9446メートルのラインダグ補修の完成、砂質浅耕田の流水客土の達成などが実現した。

● 第1期 流水客土 幹線水路  
早月川流域は水漏れしやすい砂質土壤のため、水量が増大し、肥料分はもとより鉄分、マンガンなどの微量要素を溶脱させる。そのため水田を若返らせ、水稻の生育環境を改善する目的

左岸連絡水路の上流部は、郷用水岐点までの野面石練積護岸とし、下流は電所放水路と並流して漏水防止を考慮している。



国営幹線水路



左岸連絡幹線水路

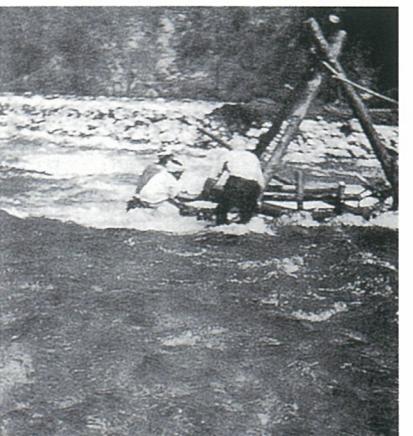


右岸幹線水路

## 三方コンクリート造りの水路とた。

中村用水連絡通路のかんがい区域は早月加積地区の大島、中村、吉浦の支配面積127.7ヘクタールである。左岸連絡水路終点中村用水分水門にはじまり、構造は三方をコンクリート造りとし、自然勾配が急なため、途中何カ所にも落差工を設け、勾配の調節が図られた。

右岸連絡水路は、左岸分水工より路線を新設し、早月川を内径1350ミリメートルのヒューム管による逆サイフォンにより横断し、有山用水、旧吉野川用水に配水する。サイフォンの呑口水槽部に土砂吐水門と呑口水門を設け、不測の事態が発生した際は、早月川本川へ放流できるようにした。



土地改良改修前の用水取水五厘堰ぞいに取水堰までの郷川・北野共同導水江（『滑川市史』通史編所収）



早月川水神社（『早月川農業かんがい排水事業概要書』所収）

## コラム マンドウサマと早月川水神社

毎年、雨季や長雨になると、早月川が氾濫して川の様相が一変し、地形も大きく変わり、沿岸の人々は甚大な被害を受けている。そこで、人命や田畠を守ってくれる神様として、石や木などをご神体とした水害よけの水神信仰が起こった。川沿いの村々では堤防上に小さな祠を建てて、「マンドウサマ」と称して敬崇し、安全祈願した。

その一つに「早月川水神社」がある。早月川の幾多の治水と水枯れをなくすために、その源流である立山剣ヶ峰より神靈（石像）を迎えた社殿を建立したものと伝わられる。祭神は木花開耶姫命で、社殿は田中小学校の奉安殿であったものを、昭和62年（1987）現在地（蓑輪頭首工）に移築した。これは、「蓑輪のマンドウサマ」として親しまれている。マンドウサマのお堂や祠は堤防の上か川縁でよく見かけられるが、近年の耕地整理や河川改修工事によって移動したところもある。魚津市と滑川市では、水神社に由来し、

マンドウ（万灯、万堂、万度）や水神様、川原の宮などの名称で呼ばれている地名が36カ所あり、そのうち12カ所が早月川沿岸である。

## ● 第2期 鋤川用水路・法花寺用水路・北野用水路

鋤川用水分水路は、鋤川用水分水門を起點として、路線は従来の路線を踏襲して改修が行われた。用水区域は北加積、浜加積地区以外を合わせ、736ヘクタールに及んでいる。鋤川用水は早く1876メートル地点で、坪川用水を右岸に分水し、さらに滑川市二塚地先において左岸に法花寺用水を分流する。支線の法花寺用水は、稻泉、法花寺の両用水を統合したものである。

### ● 第2期 吉野川縁用水路

吉野川縁用水は、右岸連絡水路終点より施工された。魚津市升方地先の旧取入口地点から、従来の路線を踏破して、魚津市有山地内で右岸に川縁用水を分水した後、魚津市浅生および有山地内の段丘山腹を流下して吉野、上野用水分岐点まで延長2138メートルを改修した。吉野用水は吉野、上野、升田、佐伯、河原地区などをかんがいし、その面積は204.8ヘクタールである。支線の川縁用水は、川縁分水場より西方に耕地の下を800ミリメートルヒューム管の暗渠で65.6メートル横断。以下従来の路線を準拠し、早月川右岸堤沿いに流下。川原川縁用水分水所まで延長1870メートル

早月第1発電所の放流と合流点を起点として路線はおおむね従来のものに沿い、滑川市大榎地先において、右岸に森川用水を分歧後、南西方向に流下し、滑川市平塚地先において平塚川と合流。配水断面で改良し、さらに流下して滑川市赤浜地先の下条用水取入れ堰まで、総延長2542メートルを改修した。

### ● 第3期 大浦用水路・大崎野用水路

県営早月川第3期事業は大浦用水、大崎野用水の区域は、室山野用水と大浦用水との中間地帯をかんがいするもので、その支配面積は49.5ヘクタールである。用水の取水口は、北電蓑輪発電所放水路末端付近に位置し、一部隧道をもつて通水。これより先は急峻な山腹を開削し、下大浦神社付近よりかんがいを始め、東福寺間に及んでいた。水路は山腹をたどった土水路で作られ、その維持管理に最大の労力費を要していた。

大崎野用水の区域は、大浦用水区域と郷用水区域の一部（東加積地区内）の中間地帯および高地川を挟んだ室山野用水区域、安田用水の区域の中間区域で、その支配面積は221.3ヘクタールである。

両用水とも、大正7年（1918）富山電気株式会社の発電計画に際し、用水路の一部を貸与し、その見返りとしてこの区間の維持管理と所要用水量を調圧水槽より分水する取り決めをし、経費の軽減が図られた。両用水路

の開削は古く、その構造はほとんど土水路のため老朽化して、所定の用水量の流下は困難な状況にあった。

このため両用水を統合して、国営事業で造成された大落差工分水槽に接続し、円滑な用水の供給を図ることとした。改修は総延長4040メートルで、このうち山腹を通過する区間は隧道および暗渠工とし、また谷川を横断する箇所は逆サイフォン工で施工し、他は開渠とした。施工は昭和45年（1970）に始まり、昭和48年（1973）に完成した。

### ● 第2期 郷用水路

郷用水路の区域は、東加積地区、北加積地区、中加積地区、西加積地区など下中島村をかんがいし、その面積は125.6ヘクタールに及んでいる。

### ● 第2期 郷用水路

郷用水路の区域は、東加積地区、北加積地区、中加積地区、西加積地区など下中島村をかんがいし、その面積は125.6ヘクタールに及んでいる。

郷用水路の区域は、東加積地区、北加積地区、中加積地区、西加積地区など下中島村をかんがいし、その面積は125.6ヘクタールに及んでいる。



早月川沿岸用水分布図（「国営造成施設管理体制整備促進事業 早月川地区報告書」富山県新川農林振興センター 所収）

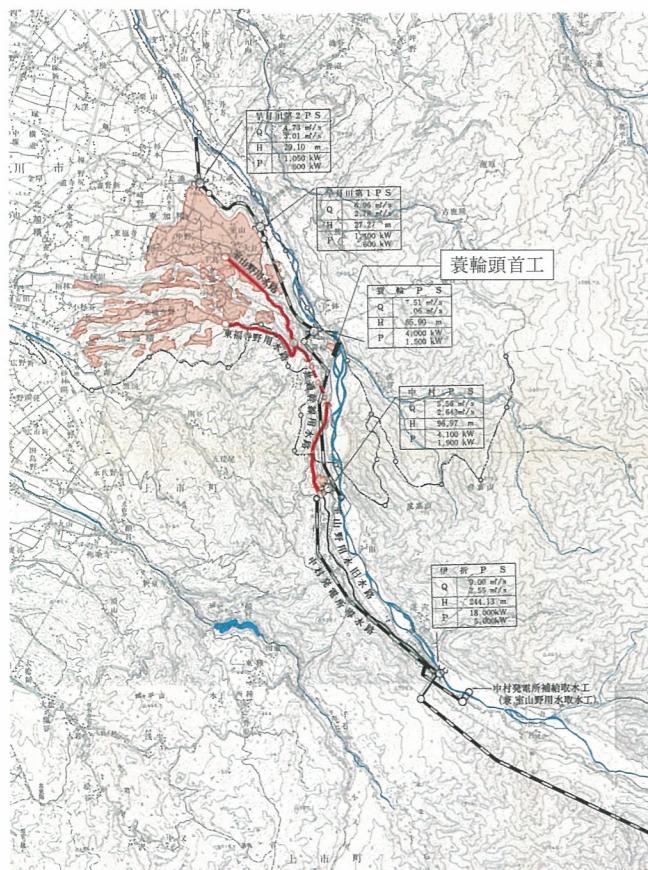
県営土地改良事業に採択され、昭和53年（1978）に室山野地区的県営かんがい排水事業が着工された。

事業は、ほ場整備事業に伴い施工された水路網は100%パイプライン化されているため、改修もすべてパイプライン構造として行うものである。共通幹線用水路は、中村発電所吸水層から室山野用水、東福寺野用水の分岐点まで導水し、蓑輪地区南側の湾曲部はすい道によってショートカットする以外、現在の路線を有効利用。さらに分水点から先も踏襲するものとされた。

平成10年度に完工した改修工事によつて全線パイプライン化が図られたことで、遠方からの監視による取水断水操作が可能となつた。



パイプライン化事業完成記念碑（大日公園）



室山野地区的県営かんがい排水事業（県営かんがい排水事業「室山野地区のしおり」富山県魚津農地林務事務所刊 所収）

区、滑川地区の各一部を合わせた891.2ヘクタールを主なかんがい区域とし、これに補給用水区域として下条用水区域（601.7ヘクタール）を支配面積としている。

県営第一期事業で施工した郷用水は、



郷用水路

鋤川用水路

現在の吉野川縁用水路

# 農業の近代化とほ場整備

## 農業の近代化に向けて

早月川沿岸地域では、昭和23～24年（1948～1949）の大干ばつで甚だな被害を受けたことを契機として、農業用水の安定を図るために、国営合口事業と、幹・支線の各基幹的な用水路の整備が県営事業で進められた。

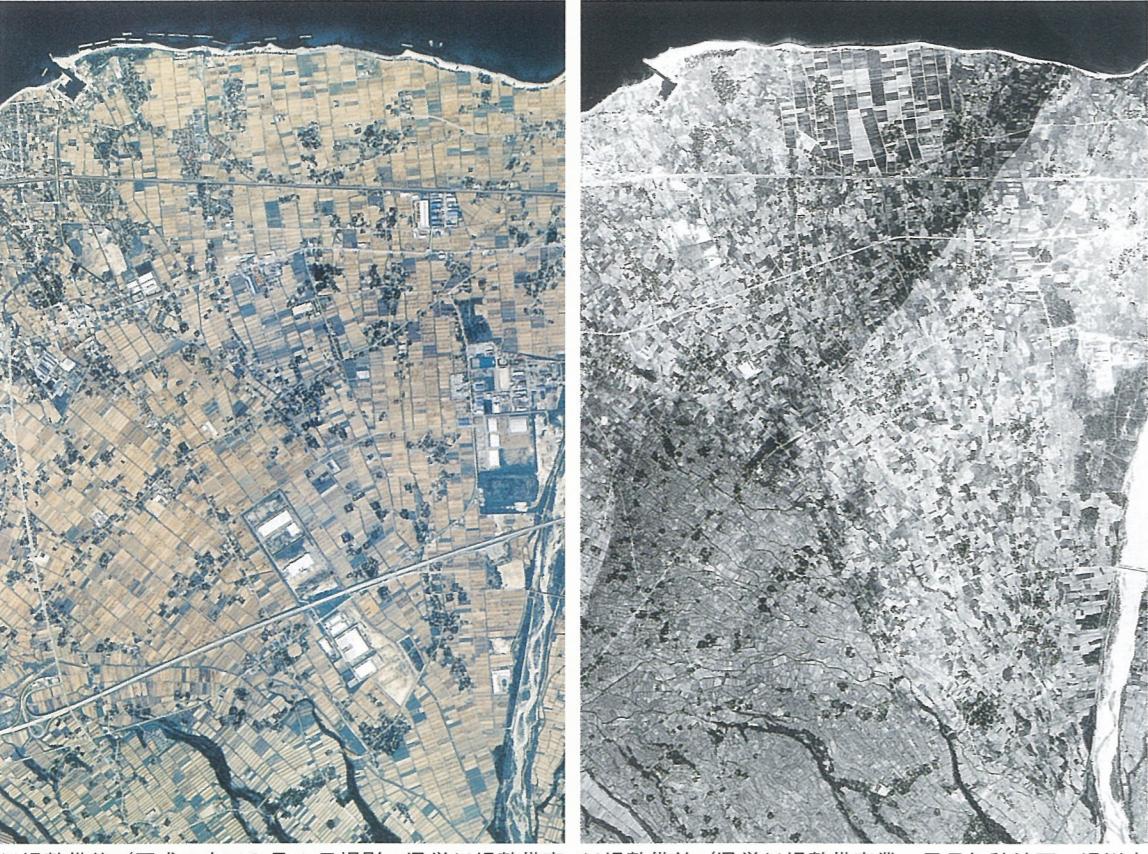
その一方で、水田の形態は依然として狭小のままであり、農耕作業には多大な労力を必要としていた。

昭和30年以降の高度経済成長期に入ると農業経営の近代化が始まった。農業経営の近代化とは、作業効率を大幅に向上させる大型農業機械の導入であり、機械化による省力化である。昭和36年（1961）11月、農業経営の近代化に資することを目的とする農業近代化資金通法が施行された。早月川沿岸地域においても農家の労働力の流出や兼業化が進むなか、生産性を一層重視した新しい営農に改善しようとする機運が高まつた。

## 県内初のほ場整備

中加積地区は、扇状地の末端に位置しているため、地域外からの排水をうけやすく、浸水被害が甚だしいうえ、水田の地下水位が高いため湿田となつ

県営・団体ほ場整備事業や農業構造改善事業を導入し、昭和40年代に全域にわたつて整備が進められた。今までの不整形に細分された水田が一区画30アールに拡大され、用排水路



ほ場整備後（平成4年10月1日撮影、県営ほ場整備事業 早月加積地区・滑川中部地区 事業報告書より）

ほ場整備前（県営ほ場整備事業 早月加積地区・滑川中部地区）

や農道の整備で、トラクターなどの大型機械の導入も容易になつた。昭和50年頃には見渡す限り碁盤の目のような水田が連なり、ほ場整備前とは全く違う景観が出現した。

（昭和39年、国の制度変更により県営ほ場整備事業と名称変更）。ほ場の区画を大型にするのに併せて、農道、排水路、暗渠排水を整備して、農業の機

## 早月川沿岸における県営・団体営ほ場整備事業

昭和36（1961）	特別団体営ほ場整備事業 中加積地区着工（～40年） ※当初は農林省、その後構造改善事業の区画整備事業として昭和37年度に着工、昭和39年より県営ほ場整備事業として完工
昭和38（1963）	団体営ほ場整備事業 荒俣地区着工（～41年） 53・4ヘクタール
昭和39（1964）	団体営ほ場整備事業 中加積地区着工（～40年） 56・3ヘクタール
昭和41（1966）	団体営ほ場整備事業 浜四ツ屋笠木地区着工（～40年） 7・1ヘクタール 県営ほ場整備事業 中加積地区着工（～45年）
昭和43（1968）	団体営ほ場整備事業 笠木地区着工（～43年） 28・7ヘクタール 大浦地区着工（～48年） 103・3ヘクタール 団体営ほ場整備事業 下梅沢地区着工（～45年） 40・3ヘクタール
昭和44（1969）	農業の第二次構造改善事業はじめ 団体営ほ場整備事業 吉浦三ヶ地区着工（～47年） 33ヘクタール 団体営ほ場整備事業 梅沢菰原地区着工（～45年） 32・9ヘクタール
昭和45（1970）	団体営ほ場整備事業 開地区着工（～51年） 160・8ヘクタール 団体営ほ場整備事業 鄭川地区着工（～49年） 78・7ヘクタール 団体営ほ場整備事業 金堀江南地区着工 17・8ヘクタール 団体営ほ場整備事業 東福寺野地区着工（～48年）
昭和46（1971）	団体営ほ場整備事業 東加積地区着工（～51年） 148・8ヘクタール 団体営ほ場整備事業 道寺地区着工（～52年） 85・3ヘクタール
昭和47（1972）	団体営ほ場整備事業 東福寺地区着工（～51年） 非補助土地改良事業（ほ場整備） 東福寺地区着工（～47年） 県営ほ場整備事業 早月加積地区着工（～平成5年） 484・7ヘクタール
昭和48（1973）	県営ほ場整備事業 滑川中部地区着工（～平成3年） 541・2ヘクタール
昭和51（1976）	団体営ほ場整備事業 赤浜地区着工（～52年） 5・4ヘクタール

（『富山県土地改良史』等より作成）

## このため昭和38年（1963）、一

筆の区画面積を30アールとした大型ほ

場整備が行われ、特別団体営ほ場整備

事業「中加積地区」が、県内最初の地

区として農林省の事業採択を受けた。

昭和38年（1963）には荒俣地区

がさきがけとなり団体営ほ場整備事業

に着手。

その後順次8区画が引き続き

着工し、昭和52年（1977）まで、

団体営により868・6ヘクタールが

整備された。

## ほ場整備事業の進展

昭和38年（1963）には荒俣地区がさきがけとなり団体営ほ場整備事業に着手。

その後順次8区画が引き続き着工し、昭和52年（1977）まで、

団体営により868・6ヘクタールが整備された。

中加積地区を模範とし、滑川地域は、

械化、農作業労働の軽減を図られた。



ほ場整備施工前



ほ場整備施工後の中加積（赤浜換地工区）地区（昭和40年頃）

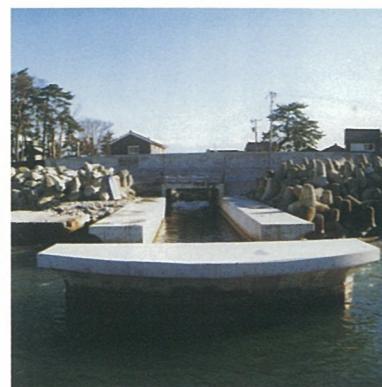
この対策として、昭和15年（1940）より、滑川町が沖田川の改修を企画。北陸線鉄橋を起点として、途中で田中川と合流し、加賀雪嶺神社付近で1500ミリメートルのヒューム管2連を並列して、河口突破する計画だった。戦時に戰況が厳しくなり、工事を休止し終戦を迎えた。戦後、沖田川の改修とは別に、単独の河川として田中川排水路の工事が県営排水改良事業として施工され、昭和23年（1948～1951）の4カ年で、吐口工および排水路1732メートルが改修された。

その後、中加積地区では県内初のほ

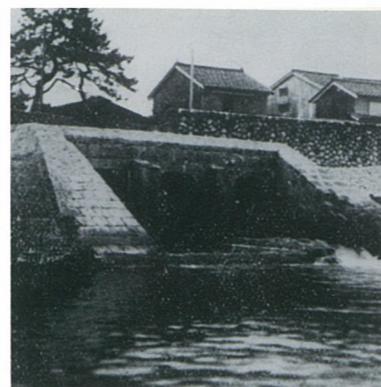
場整備が行われ、水田の大区画化や中型農業機械の導入、用排水路の分離など農業形態が大きく変化したため、基幹排水路の整備が必要となつた。昭和49年（1954）にかけて行われた第2次田中排水改良事業は、田中川（田中川排水路）と小林川を一本化し、田中川の上流域を小林川へ導流させるものである。総事業費7億5千万円あまりかけて改修され



田中川・小林川の改修計画図



昭和59年改修の田中川吐口工（『県営かんがい排水 田中川地区事業誌』所収）



昭和26年改修の海岸吐口工（『県営土地改良事業着工30周年記念誌』所収）



県営圃場整備事業完工記念碑（『県営ほ場整備事業 早月加積地区・滑川中部地区 事業報告書』所収）

# 早月発電所と小水力発電

## 用水を利用した電源開発

早月川水系の電源開発は、大正年間に大手企業を中心に地元資本も参加して進められた。立山水力電気株式会社は、大正9年に中村発電所、15年には蓑輪発電所の運転を開始。富山電力株式会社は、大正7年に早月第一発電所、8年に早月第二発電所の運転を開始。また、北加積村長の石坂甚治らが中心となつて加積電気株式会社を設立し、郷用水を用いて大正9年に森野発電所

の運転を開始した。翌10年には、大岩村の土肥庄平らが中心になつて設立した上中島水力電気株式会社によつて、下樁用水を用いた下樁発電所が運転を開始した。

戦後、電気事業の再編成によつて、これらの発電所の大半は北陸電力株式会社の経営下に入つて、今日に至つている。また、北陸電力株式会社によつて、昭和28年（1953）には伊折発電所が、38年（1963）には馬場島発電所が、運転を開始されたものである。

## 早月発電所設立以前の早月川水系水力発電所

発電開始年月		使用水量 (m³/s)	有効落差 (m)	許可出力 (W)
大正7（1918）	5月 立山水力電気白萩発電所	5.26	74.50	3,200
	5月 富山電気早月第一発電所	4.73	29.10	1,050
大正8（1919）	12月 富山電気早月第二発電所	6.96	28.00	1,400
	8月 立山水力電気早月川中村発電所	5.57	97.00	4,300
大正9（1920）	12月 加積電気森野発電所			(出力)200
	7月 上中島水力電気下樁発電所			(出力)40
大正10（1921）	12月 立山水力電気蓑輪発電所	7.51	65.80	4,100
	昭和28（1953） 9月 北陸電力伊折発電所	9.00	240.00	18,000
昭和38（1963）	6月 北陸電力馬場島発電所	7.90	319.00	21,000



早月発電所（『顕彰誌』斎木久治先生顕彰会発行 所収）

早月発電所定礎式（『顕彰誌』斎木久治先生顕彰会発行 所収）

キロワットの発電を計画。発電から得られる利益を維持管理費の一部に充てることとし、「農山漁村電氣導入促進法」（以下、促進法）に基づいた。しかし促進法で定める発電は、発電出力

2000キロワット以下の規模のものであつて、土地改良区が計画した発電出力6000キロワットの大規模な発電所は工事認可が得られなかつた。そこで適用範囲を改正するため、早月川沿岸用水土地改良区理事長の斎木久治が昭和48年（1973）から農林水産省、通商産業省へ陳情を重ねた。その結果、昭和52年（1977）促進法施工規則が一部改正されたことで、事業化が実現した。

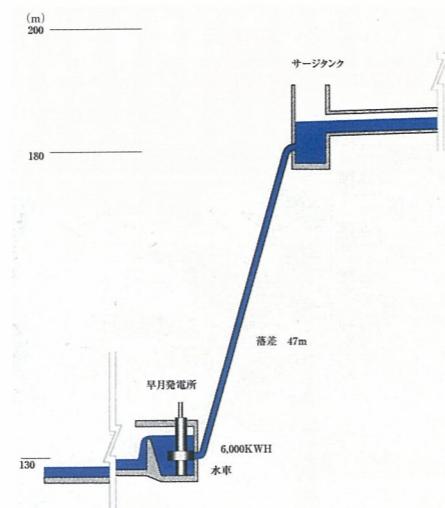
農業用水を発電目的に使うために河川法に基づく水利使用の許可を得る必要があり、建設省への許可申請と陳情に時間がかかり、着工は当初計画よりかなり遅れたが、土地改良区は、昭和51年（1976）10月に早月川沿岸土地改良区の出資による早月川電力株式会社を設立した。早月川電力が「用地」「資金」を調整し、北陸電力が建設工事の「計画」「施工」を担当するという契約が締結され、昭和53年（1978）8月に着工、昭和55年（1980）に営業運転が開始された。売却電力の収益により、農業用水路の維持管理費の約4分の3がまかなわれ、流域農家の負担軽減に大変役立つている。

早月川電力では、発電力のさらなる増量を図るため、滑川市蓑輪の国営道水路付近で、既存の蓑輪頭首工沈砂地を利用した「新早月発電所（仮称）」の建設・運営を計画している。

また、団体営地域用水環境整備事業として滑川市杉本の鋤川用水路を用いた小水力発電施設を、2012年度から整備することが決定した。最大出力570キロワットで、総事業費は8億7千万円である。



早月発電所発電機水車（早月発電所提供）



早月発電所発電のしくみ（早月発電所提供）

## 小水力発電の未来

平成23年3月11日に発生した東日本大震災及び福島第一原発の事故を契機として、再生可能エネルギーを利用した発電が注目を集めている。

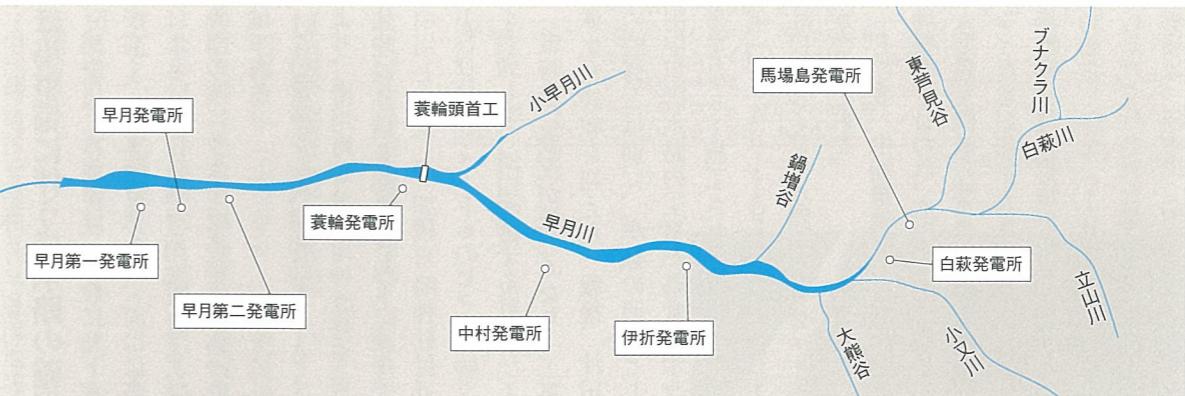
「小水力発電」とは、発電出力が数10キロワットから数1000キロワット程度の比較的小規模な発電の総称であり、幹線水路やダムなど比較的水量の豊富な箇所に建設されている。

平成24年には、株式会社アルプス発電が、早月川の支流である小早月川から取水する小水力発電の小早月発電所を稼働させた。最大出力は990キロワットである。

これまで土地改良区が小水力発電を設置した場合、売電収入の充当範囲が限られていたが、県からの粘り強い要望により、土地改良施設全体の維持管理費にも充当することが可能となつた。

また、団体営地域用水環境整備事業として滑川市杉本の鋤川用水路を用いた小水力発電施設を、2012年度から整備することが決定した。最大出力570キロワットで、総事業費は8億7千万円である。

**早月川電力株式会社の設立**  
昭和40年代の農業の現状は、高度経済成長の過程で農村労力は他の産業へどんどん流出し、農業の体质は著しく弱体化した。その中で、土地改良区は施設の維持管理費の負担軽減方法を求められていた。このため早月川沿岸土地改良区では、国営事業で施工した蓑輪頭首工と接続する幹線導水路の落差47・25メートルを利用した6000



早月川水系発電所立地略図



室山野旧用水跡の鉱山道路（『近代百年のあゆみ 眼でみる滑川市』所収）

## コラム

### 輝水鉛鉱採掘から始まつた開発

早月川流域の電源開発は、モリブデンの原鉱である輝水鉛鉱の採掘がきっかけであった。大正4年（1915）東京在中の医学博士・岸一太らが中心となり、劍岳の池ノ平に埋蔵する輝水鉛鉱の採掘事業に着手。当時は第一次世界大戦中で、ドイツ軍が兵器の一つとして、鋼にモリブデンを加えて作る鉄砲を使用していた。そのため輝水鉛鉱が注目されていた。岸は富山鉱業株式会社を設立し、事務所を滑川町に置いた。池ノ平で採掘した鉱石をロープウェイで杉ノ平へ下ろし、そこから馬車で伊折→室山野旧用水跡道路→早月中村→蓑輪→千鳥経由で滑川に運びだした。

富山鉱業株式会社は製錬所で必要な電力を自社で賄うため、立山水力電気株式会社を創設。大正7年、早月川上流の白萩村ゾロメキで白萩発電所の運転を開始させたが、採掘者の越冬用の宿舎建設中におこった事故のため、輝水鉛鉱の採掘事業はわずか3年で終わった。



# 先人たちの事績

農民の父

椎名道三（1790～1858）

寛政2年（1790）、新川郡小林村（現・滑川市）の十村役・宝田宗三郎の三男として生を受ける。生後間もなく同郡大熊村の椎名家の養子となる。養父から道山の名をもらつたが、後に生まれた妻子が成人になつたのを機に椎名家を譲り、別家して名を道三と改めた。

文化3年（1806）、道三17歳のとき、大熊村（現・魚津市）近くの押場峠を開拓して4.5ヘクタールの水田と用水を完成させている。これは、田畠がわずかしかなく、稗・粟・山菜などで飢えをしのいでいた村民の窮状に心を痛めていた道三が、「山麓の未開の原野を開拓し、民に土地を与えるば、食べていいけるはずだ」と考え、養父に進言したものであった。



椎名道三像（上市西永寺藏）

これを機に、村民からは「神童」と呼ばれるようになる。

道三の名声を高めたのが、室山開きである。

文政8年（1825）、道三は、一度失敗していた室山野用水の掘削をはじめ、二年後に完成させている。これは、伊折の荒禿山の崩壊や葦原谷、蓑輪の土砂崩れなどによって満足な通水ができず、費用倒れとして中止しようとしていた室山野台地開拓と用水開削を、兄・宝田宗兵衛の窮状を見かねて測量・掘削のやり直しを引き受けたものであった。

その後、天保11年（1840）黒部市の十二貫野用水の開削に成功。他にも東福寺野台地の開拓や、能登や加賀など各地の荒地に用水を引き、水田にわたり貧民を救おうと努力した。安政5年（1858）5月5日逝去。享年69歳。

終焉の地・滑川市田林には道三の銅像とともに顕彰碑が建てられ、滑川も与えられた褒美の土地やお金のほとんどを、貧しい農民に分け与え、生涯にわたり貧民を救おうと努力した。安政5年（1858）5月5日逝去。享年69歳。

市の発展の礎を築いたひとりとして、その業績が後の世に伝えられている。

石坂専吉（1895～1951）

明治28年（1895）、早月加積村栗山に生まれる。魚津中学校を卒業後、日本体育専門学校で学び、中学校教諭として青少年の体育の向上と指導に、その生涯の前半を尽くした。

昭和22年（1947）、第1回公選選挙で早月加積村第8代村長に就いた石坂専吉は、戦後の混乱した時代に、生來の括淡明朗、確乎不拔の精神力で村政の刷新、農地改革の促進などに取り組んだ。

村長に就いた翌年、昭和23年から続いた干天で、水不足になった早月加積村の窮状を救うため、当時助役だった石坂清とともに、早月川合口化に乗り出した。早月川流域の用水不足を懸念

選挙で早月加積村第8代村長に就いた石坂専吉は、戦後の混乱した時代に、生來の括淡明朗、確乎不拔の精神力で村政の刷新、農地改革の促進などに取り組んだ。

昭和22年（1947）、第1回公選選挙で早月加積村第8代村長に就いた石坂専吉は、戦後の混乱した時代に、生來の括淡明朗、確乎不拔の精神力で村政の刷新、農地改革の促進などに取り組んだ。

村長に就いた翌年、昭和23年から続いた干天で、水不足になった早月加積村の窮状を救うため、当時助役だった石坂清とともに、早月川合口化に乗り出した。早月川流域の用水不足を懸念



石坂 清氏

した専吉は、県下各河川や農業用水を審らかに視察踏査し、滑川地区の各町村長を訪ね、早月川合口化の必要性を説明し、参加協力を要請して回った。合口用水の着工には、水利権の関係で強く反対する町村もあつたが、説得を繰り返した。

昭和25年（1950）10月、病に倒れた専吉は、病床にありながらも一日として村政を怠ることなく務め、翌年3月26日には、早月川合口用水期成準備会を結成し、自ら会長に就いている。4月には村長に再選されたが、病は癒えず、合口化の実現を果せないまま、同年6月26日に逝去。享年58歳。

流水客土の父  
石坂 清（1900～1965）

明治33年（1900）、早月加積村中村に生まれる。富山県師範学校を卒業後、中新川郡浜加積尋常高等小学校に奉職、以来二十年あまり教育に情熱を捧げた。

昭和22年（1947）に教育界を勇退し、石坂専吉村政のもとで助役に就き、地域の発展に献身した。昭和23年4月

には、農業協同組合発足と共に初代早月加積農業協同組合長に就く。

石坂専吉の逝去後、早月加積村第9代村長（昭和26～28年）となり、早月川合口化にむけて、近隣町村の関係各所に参加協力の懇願を続け、ついに昭和28年に国営早月川農業水利事業の着手にこぎつけ、合口化を完成させた。その後の県営かんがい事業では、早月川流域の砂質の水田に、山間地から用水を使用し赤土をながす流水客土を行し、水田の土壤を改善した。

この間、滑川市制施行と共に市農業指導事務所長、市農林課長を歴任し、昭和30年（1955）には市職員退職と同時に早月川沿岸土地改良区の専務理事を務めた。昭和40年（1965）11月18日に逝去。享年67歳。

小水力発電の先駆者  
斎木久治（1908～1985）

明治41年（1908）、浜加積村（現・滑川市）に生まれる。県立魚津中学校を卒業後、東京農業大学予科・農学部を経て、昭和8年（1933）に東京大学農学部に学び、農業土木講習を修了。翌年から富山県に奉職。30余年にわたって農地行政に携わり、この間に、国営小矢部川および国営射水農業水利事業の導入、刀利ダムの建設促進、大型は場整備のための基礎調査の実施、県営上市川・小矢部川各発電所の建設などに手腕を發揮。農業水利、土地改良など、一貫して地域農業の振興に努



斎木久治氏



斎木久治像（滑川市中野島）



斎木久治顕彰碑（滑川市中野島）



石坂 清胸像（滑川市中村）



石坂専吉氏



椎名道三事歴碑（滑川市田林）



椎名道三像と顕彰碑（滑川市田林）





蓑輪頭首工



上空から見た立山連峰と早月川扇状地



室山野用水取水口

靈峰剣岳を源とする清流 早月川沿岸用水  
平成25年3月 発行

発 行 早月川沿岸用水歴史冊子編さん委員会

(富山県農林水産部農村整備課/富山県新川農林振興センター/早月川沿岸土地改良区/  
室山野用水土地改良区/水土里ネット富山(富山県土地改良事業団体連合会))

事 務 局 富山県新川農林振興センター 〒937-0863 富山市魚津市新宿10-7

TEL0765-22-9137 FAX0765-22-9154

編集協力 青青編集

印 刷 富山スガキ株式会社